昭和三十年一月十日　初版印刷
昭和三十年一月十五日　初版發行

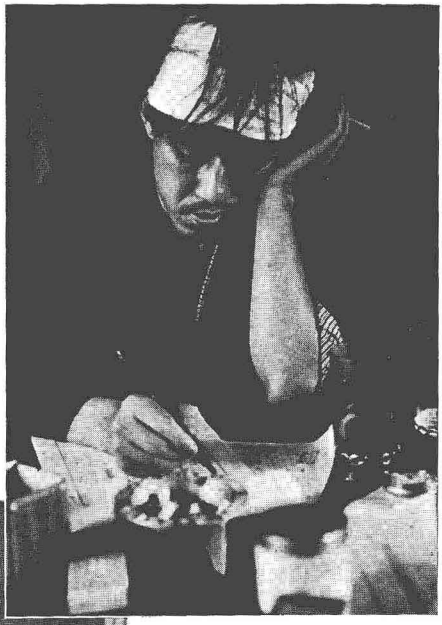
昭和文學全集52
武田麟太郎
高見順　集

著作者　武田麟太郎
　　高見順
發行者　角川源義
印刷者　小田茂作
東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
電話九段〇一一一〇一一四

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロス工業株式會社
整版所　中光印刷株式會社
印刷所　東日本印刷株式會社
製本所　德住製本所

Printed in Japan



武田麟太郎
昭和十二年（三十四歳）
「風速五十米」執筆中 自宅二階にて

高見　順
昭和二十七年九月（四十六歳）
北鎌倉自宅にて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

武田麟太郎集

筆蹟　武田麟太郎　巻頭寫眞

銀座八丁　高見順

暴力

日本三文オペラ

市井事

市井事　第三篇

一の酉

井原西鶴

大凶の籤

好きな場所

情婦

雪の話

面影

九

五三

六九

八〇

九一

九八

一〇八

一二七

一三七

一四三

一四八

一五三

高見順集

筆蹟

故舊忘れ得べき

如何なる星の下に

あるリベラリスト

解説　野田宇太郎

年譜

彌生さん

隨筆

レアリスト

「一の酉」の「おしげ」

西鶴について

創作内論ばなし

手澤本

年齢と小説

初心のころ

解説

年譜

一五九

六八

一〇七

一二六

一三六

一四三

一五三

一六〇

一七一

一七四

一七九

二六六

二四四

二六二　山本健吉

二六五

武田麟太郎集

よしや此の身ハ
どうなり果てよと
国に自由が
残るなら

昭和十二年春

武田藤太郎

銀座八丁

藤山さん、女の人から電話だよ、とガタビシする古い階段の中途から、下の果物屋の小僧が聲をかけた時、ちやうど彼は鬚をあたり終つたところで、化粧水をヒリヒリする頤に塗り込んでゐた、誰からかな、と考へながら、下りて行つた。——ひよつとすると、バアテンダーの彼と同じく、西銀座の酒場「ロオトンヌ」で働いてゐる女給ののり子からかも知れない、けふは灯がついて店の開くまで、赤坂のホールで一しよに踊らうと約束してあつたのだが、急に都合が悪くなつたのかも知れない。

もうすつかり春になつて了つた、生暖かくて肌は汗ばむほどのいい天氣である、明るい色彩に富んだ果物の官能的な香ひが、むうつと若い藤山の鼻を刺した。

「こちらは、大森の豐田家でございますが」と、電線を傳つて來る、女中らしい聲が云つた。

のり子ではなかつた、と思ふと同時に、なるほどと、彼は獨りでうなづいたのである。その待合は「ロオトンヌ」の女主人あき子のよく出入するところで、彼もまた度々彼女に連れられてお伴をしたことがある、——昨夜おそく、もうかんばん近くになつてから、あき子は誰かに呼びだされたとみえ、ちよつと、と云つてそそくさと出かけて行つたが、そのまま歸つて來なかつた、藤山は店のあとじまひをし、唯一つだけ點けた電燈の下で、その日の上り高と照合して傳票を調べ、それを現金と一しよに小さな黑鞄に納めると、新富町の彼女の住居の方へ廻つて見たが、留守番の老婆がひとりゐるだけであつた、こんなことはよくあるので、彼は別に氣にとめず、責任上鞄は預かつて、新橋二丁目の下宿へ戻つたのである。

「——あの、マダムがあなたにすぐこちらへいらしてほしいのださうですが」

聲は續けて云つた。

「ああ、さう——ゐるんですか、他に誰か」

と、彼は念のために聞いてみた。

「——は、あの」

曖昧に相手は返事をして、

「その時、何ですか、鞄も一緒に持つて來て頂きたいつて」

「分りました」と、彼は癖の軍隊口調で、はつきり云つた、——また、勘定が足りなくなつたんだらう、だらしのない話だ、だがさうすると、彼女の方で拂ひをしてやる相手にちがひないが、一體誰だらう、あいつかな、と胸の中でつぶやくのであつた、それにしても、二人がさんざん遊び興じていい思ひをしたあと始末に、こちらが行かねばならぬなんて、あんまり有難くもない役割だ、と苦笑した、そこで、わざと、ゆつくりしてやれと、

「ぢや、二時間ほどして、伺ひますと云つて下さい、ちよつと先に果す用があるから」

のり子に逢つて、ゆつくり遊んでゐられない事情を話し、少しだけ踊つて行かう、それから大森へ行けばいい、と決めたのである。

すると、豐田家の女中は、あわてて云つた。

「——もしもし、あの大急ぎでお願ひしたいんですけど、——實は、マダムがお悪いんで！」

「悪いつて？　病氣ですか」

「ええ、大へんなのですよ、けさがたから」

——何てことだ、と藤山は舌打ちした、待合で病氣になるなんて！　彼は、昨夜からそこにゐたであらう相手の男にも、妙に腹立たしい氣持で、洋服を着更へるのであつたが、お洒落なので、なかなか手間どつた。

果物屋から、春の陽ざしの中へ出て來た藤山の姿を、もしも彼をバアテンダーと知らない人が見たら、何ものと思ふだらう。

一分の隙もない青年紳士。

流行のラグランの春外套の下には、英國風に仕立てた淡鼠色の小格子縞を均齊のとれた軍隊歸りの身體にうまく着こなし、同じ系

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

統の縞色のマフラアも落ちついてゐるし、手套と云ひ、ステッキと云ひ、すべてぴつたりとしてゐた彼の容姿を――夜ふかし職業に係らず赤味を帶びた健康さうな頰、太い眉をあげる時冷い光に見開く眼、稍〻いかつた鼻も、氣障つぽくまげる口も魅力がないとは云へぬ、幅廣い胸を張り、少しく棄鉢氣味に踏み出す足取りは映畫の影響で、とがめてはならないだらう、――さうした彼の容姿をたすけて、現代的な美を感じさせてゐた。

もちろん、彼が酒場「ロオトンヌ」から受取る給料は僅か三十圓で、これに添ふるに毎夜消費される酒の空瓶が自分のものになり、醉狂な客によつては、女たちと同樣にチップを呉れたりするが、總收入はどう考へて見ても、これだけの服裝をするには不十分なものである、――だから、そこには何かあるのであらう。

藤山はゆつくりと煙草に火をつけながら、流してゐる自動車を物色してゐた。紳士に相應しい良い車を拾はねばならないのである。

京濱國道は混雜してゐた、白つぽいアスファルトは、トラックや自動車、自轉車で充滿してゐて、黑い油のしみ出たタイヤの跡が幾すぢも殘つてゐた。警笛や軋む車輪の騷音はぶつかりあつて、人をいらいらさせた。

鈴ケ森のガードを少し過ぎて、左側海岸の方へ折れると、急に靜かになるのであつた。夜ならば、毒々しいネオンライトで、家の名を大きく屋根の上に出してゐる待合が二三軒立ちならんでゐたが、さすが白晝のことで森閑とした空氣のうちに沈み、眠つてゐるやうであつた、磯の香が春風にはこばれて來た、海には海苔を採る人たちが、のどかに見られた。

豐田家の門から庭づたひに、よく肥えた女中に案内されて、藤山は離れの部屋へ通つたが、途中で、

「どうしたんだ」

と、たづねた。

「喀血なさつたんですよ、――私たちは最初心中かと思つて大騷ぎしました」

ふんふんと、彼はうなづいた、あき子は前から肺が惡くて、彼が知つてからもさうした經驗は幾度もあつたので、そんなら大したことはない、と彼は考へたのである。

しかし、云ふまでもなく部屋の襖を開いた時、彼は急を聞いて驅けつけたといふ狼狽した色と、如何にも心配さうに眼を伏せた神妙な表情とを作つてゐた。

その離れの四疊半は、どういふ意味からか、四壁がちやうど腰の高さ程に鏡がはめこんであつた、だから、あき子の蒲團がいやにけばけばした赤い色をあちらこちらに反射させてゐて、視力を奪はうとするのであつたが、彼は逸早く男が――黃色いくたくたのレインコートまでも着けたまま寢そべつてゐる男が誰であるかを見極めた。

やはり、あいつであつた。

だが、藤山はそちらの存在は全然無視したやうな冷い態度で、外套を脫ると、あき子の枕許に坐つて、

「どうしたんです、一體」

と、詰問の鋭い響きをあいつに利かし、彼女の靑ざめた額の上にかがむやうにした。

あき子は透きとほるやうな眞白な顏になり、もの憂げに、大きな二重眼瞼を開いたり閉ぢたりしてゐた。

「もういいの、何でもないの」

彼女は云つてから、括れた頤をちよつと突きだすやうに動かして、咽喉の奥の方で微かな咳をした、――普段でも、彼女はそんな力のない咳を、殊に何かおしやべりをした後には必ずしてゐたが、酒場では誰も氣づかなかつた、その咳と兩頰の不自然な赤さ、毛細管の先端まで血の走つてゐるのが分る赤さは、彼女の病氣のしるしであつた、しかし、酒のせゐで小肥りした身體や化粧のために、寧ろ健康に見られたのである。

「最近は少し飲みすぎましたからな」

と、藤山は堅い表情で云つた、――「御亂行もいい加減にして養生してもらはなくちや」

彼はレインコートを着た男の方へ眼をやつた、その男は、あひかはらず寢そべつたまま、あちらを向いてゐたが、油をつけてない髪の

延びた頭に肘をかつて、不興氣に新聞を繰りかへして讀んでゐるのが、いびつな鏡に映つてゐた。

あき子は、胸にあててゐた氷嚢を取り出して、疊の上に置いた、すつかり生暖くなり、氣味悪く、ぐにやぐにやしてゐた。

藤山は、それをつかむと、默つて立ちあがつた、庭履きを窮屈さうに突つかけて、料理場へ行つたのである、そこで、氷を割つて入れかへながら、女中と二三の會話をした。

「昨夜は隨分と醉つて、二時すぎになつて、いらつしやいましたわ、それからまた、お酒なんですもの」

と、女中はあきれたやうに云つた。

苔の生えた古い庭石傳ひに戻つてくると、樹と樹との間に、ちらと動く人影があつた、それは急ぎ足に出口の方へ行つて了つたが、あのレインコートの男にちがひなかつた。

部屋に入ると、想像にたがはず、果して彼の持つて來た黑鞄は開かれてあつた、傳票はばらばらになつて枕許にちらばつてゐた、——やはりあいつに金を吳れてやつたのである。

あき子は、すぐ新富町へ歸りたい、と云ひだした、寢臺車を呼んでくれ、それから、氣がついて見ると、寢卷も買つて來てもらはねばならぬ、ここのを着て歸れないからと、云ふのであつた。

「大丈夫ですか、そんなことして、——もう暫く、靜かにしてゐた方がよかないかな」

と、藤山は危ぶんだ。

「大丈夫、クラウヂンを二本注射したんだし、すつかりとまつてしまつたやうだから」

ぢや、せめて暗くなるまで、ここにゐませう、それに晝日中ぢやいくら何でも、恰好もつかないし、と皮肉をまじへたつもりで、彼は云つた。

「駄目」

さう云ひきつて、あき子は、ハンドバッグから小さな手帳を取りださせた。——そこには、日々の彼女の豫定、彼女の所謂「ランデヴ」の表が簡單な符號で記されてあつた、午飯は誰とどこで、それから誰と逢つて映畫を見に行く、次に、といつた風に手際よく時間を無駄なく區切り、酒場に來る客の誘ひに應じてゐるのであつた、けふの男たちは待ち呆けを食ふわけである。

「五時頃、內田に資生堂で逢ふことになつてるの、——けふ、お金貰ふ約束なんだけど、まさか、ここへ呼ぶわけにもいかないしね、だから、どうしても歸らなくちゃいけないわ、その時分電話して、病氣だから、住居の方へ來て下さいつて、云つて頂戴」

と、咳をしたり、痰をはいたりしてはきれぎれに云つた。

——內田といふのは、彼女のパトロンで貴族であつた。

その內田が、赤玉のオランダチーズと果物籠とを携へて、新富町へ來たのは、五時をほんの少し過ぎた頃であつた。

「何故、もつと早く知らせてくれなかつたのです」

彼らしい丁寧な言葉つきで、柔和に云つた、そして、三十五にしては生えあがり、艶艶しく光つてゐる額や、和服の袖の中まで、手帛でにじみ出た汗をぬぐふのであつた。

ちやうど一時間前に、あき子と藤山は、やつとのことで、大森から戻つたのである。馴染の家でも借りるのが彼女は嫌ひで、今まで一度もそんなことはしなかつたが、その時は結局診察料藥代なぞは立て替へてもらはねばならなかつた。そこで、銀座のお店の方はよく存じてをりますから、といふ豐田家に、わざわざ住居の所在も敎へて來たのであつた、——それから、擔ぎ込まれた彼女に、すつかりうろたへて了つた婆やを促して、取り敢ずかかりつけの町醫者を呼び、藥瓶なぞも枕許に取りそろへた、落ちついてから、內田へ、青山高樹町の自宅へ電話をかけさせるとすでに彼は外出したあとであつた。

あき子は彼に云ふのである。

「——でも、あまり御心配をおかけするのもどうか、と思ひましたので、それに、大したことはないんですもの」

さすがに、彼女は烈しい發作の後の衰弱を、歸つて來たので一安心したせゐか、今に

なつて見せはじめてゐた、少しくしはがれた聲や、微かな作り笑ひも、殊に内田には、痛痛しげに感じられた。

藤山は、ちよつと舌を出したい氣持で、

「では、僕は店へ行きますから――どうせ、けふは日曜だから、閑でせうが」

と、二人きりの時とはちがつた慇懃な態度で、病人に云ひ、あす朝早く來て見ます、とつけ加へるのであつた。内田にもいやに四角張つた挨拶をして、表へ出た。

界隈の藝者屋では、女たちが鏡に向つて化粧してゐるのが見られた。その小道を抜けて、三吉橋にかかつた。

歩きながら、藤山の頭には、今の内田の顔がこびりついてゐた。

――公卿華族らしく血色が惡くて、眼尻の下つた、受け唇の、全體に華奢といふよりは見るからに頼りない屠弱な肉體。事業好きで活動家だつた先代譲りの財産によつて、ふところ手のまま、無爲徒食してゐる退屈な身分。繪をやつてゐるが、そしてその一枚は「ロオトンヌ」の黄色い壁にもかけてあるが、もとより拙劣で、取り立てて云ふほどの事はない、そのくせ、何や彼やと藝術に一片の趣味を持つてゐて、單調な生活のはかない裝飾にしてゐる、刺戟を酒と女とに求めて、辛うじて生存の興味を呼びさまさうとするのだけれども、烈しくそれらに沒頭して了ふだけの勇氣や情熱に缺けてゐた、――唯もう手を束ねて、亡んで行くのを悄然と待つてゐるといつた風の可哀さうな男！

ずつと前から、藤山はこの親切でお人よしの内田を何とか利用しようと企んでゐた、彼の豫想によれば、どうせ酒場「ロオトンヌ」はさう永くはない、今のところ、内田のおかげでやつと持ちこたへてゐるのにすぎなかつた、――あき子の出鱈目な行動や、彼女のルーズさからくる回收不能の常連の貸金が亘大な額に上つてゐるし、また一切を委任されてゐる彼のごまかしなぞによつて、經濟はすつかり行きづまつてゐたからである、だから、出來るだけ早く、身の振り方を決めて置く必要があるが、それには内田に取りいつて――

そこまで考へた時に、彼はギョッとした、マダムの最近の愛人であるあいつも亦内田に食ひさがらうとしてゐることに氣づいたからである。

日曜日は、銀座のもつとも田舍臭くなる日である、賑かといふよりは、むやみに騒々しく、埃つぽく汚れて、落ちつきがない――、日頃、この町に餘り緣のない人たちが家族連れで、ぞろぞろと物珍しさうに歩き、その代り、いつもはここを自分の庭のやうにしてゐる連中が、影をひそめてゐるのであつた。

殊に、その日は第一日曜だつたので、東側の鋪道なぞは、百貨店を中心にして、自由に身動きもならぬほど混雜してゐた、ちやうど夕暮れの、すつかり暗くなりきらない中途半端なひとときで、すべての風景は灰色に閉ぢ込められ、憂鬱な限りであつた、――一丁目から尾張町にかけては、あちらこちらでレコード宣傳の擴聲器が安手な流行歌を一帶に響かせ、それが幾重にもかさなりあつて、唯でさへ喧しい人や車の往來を尙一層かき立てゐた。

藤山は人ごみを抜けて、西側の裏道を行つた、酒場「ロオトンヌ」は五丁目にある。

まだ誰も來てゐなかつた、――昨夜のままの亂雜な内部は暗くてむうつとすえた空氣の中に、爭へぬ女の體臭がこもつてゐた、テーブルの上には飲みかけのグラスやビール瓶がひつくりかへつてゐたり、食べものの殼や紙ぎれがそこいらに小汚く、位置の出鱈目になつた椅子やソファの下からは大きな鼠が人を恐れず、音を立てて、走り廻つてゐた。

彼は嵌め板の床の上に唾をぺつと吐いてから、腰を下し、暫くぢつとしてゐた。

「――――」

何とか元氣のいい聲で、花屋が入つて來た、昨夜の花を捨て、新しく花瓶に生けるのである。

「婆やはまだなんですか」

「うん、おそいんで、實際困つちまふ、歸りがけに寄つてくんないか」

さう云つてゐる時に、髪のすすけた、黄色い顏の婆さんが、風呂敷包み片手に腰をまげ

るやうにして、現れた、彼女は、
「おそくなりまして」
と、あやまり、奥の控へ部屋の方へ入つた。
「駄目ぢやないか、もう幾時だと思ふんだ、もう少し早く濟んでないと、商賣にさしつかへるぢやないか！」
藤山は、そのわびしい背後姿におつかぶせるやうに、とげとげしい聲で呶鳴るのであつた。
彼女は近くに住んでゐる、金春藝者相手の老車夫の女房である、ここの掃除と、女給たちの簡單な夜食を用意しに來るのであつた。
片づけられはじめた。
空瓶屋が來て、瓶數を鉛筆で記した受取を置いて行く、藤山は彼に云つた。
「景氣はどうかね」
すると空瓶屋は、どこどこさんは、と銀座酒場の名をあれこれとあげ、各〻の景氣のよさ惡さについて告げるのであつた。彼の扱ふ瓶の數で、大體のところは察しがつくわけであつた。
店はいつの間にか綺麗になつた、全部の燈が入つた。
藤山も洋服を着更へ、バアテンダーの白コートや前掛をつけた。
女たちも次から次へと出て來た、仔細に見るならば、彼女たちは既に疲れてゐる、けふの日曜を遊び廻つて來たのに違ひない。
彼女たちは、化粧を直したり、相手の事を「テキ」といふ風な彼女等仲間の流行語で雜談をし、キヤツキヤツと笑つた。
だが、どうしたものか、のり子だけは中々來なかつた、藤山は時計を見てばかりゐたが、
「どうしたんかな」
と、口に出して云つた。
本當にひまな夜であつた。
「これだから、日曜日はきらひ」
短く切つた髪をうしろへ撫でつけるやうにして、町子といふ女が云つた、口紅のついた煙草を横ぐはへにし、眉をしかめながら、立つて行つて、レコードをかけた。
「藤山さん」
と、彼女は兩手をのばした、踊らうと云ふのである。——彼は色とりどりの美しい洋酒瓶を背にして、小さな椅子に腰を下したまま、實話ものの雜誌を讀みふけつてゐたが、
「よし」
と、スタンド横のくぐりを拔けて出て來た。
町子も銀座では隨分と古いもの、あき子がまだ、東銀座三十間堀沿ひの、當時の好みでグロテスクな風に造作された暗い酒場で働いてゐた頃は、朋輩であつた、一度不幸な結婚をしたと云ふが、再び現れて、あちらこちらの店を歩き廻つてゐた。
——大體において、銀座裏の數多いバアでは、女たちの顔ぶれは決つてゐた、同じところに永い間ゐるのは稀で、甲から乙へと動いてゐるのである、だから、自然と互ひに馴染になつて、銘々の性癖は云ふまでもないこと、一身上の私事にいたるまで通じあつてゐるのは、驚くほどである。客も同樣、決つた顔ぶれが各自根城はあるとしても、その一軒だけに通ふのは殆どなくて、ここかしこと飲み歩いてゐる、客も女給も經營者も互ひに知合ひになつて了ひ、銀座裏の酒場全體が一つの世界、客にとつてはクラブのやうな、經營者側からいへば、チェンストアのやうなものを形作つてゐた。——
「もう一度」
藤山と町子とがブルースを踊つてゐると、三人の女は、あき子や客の噂ばなしをしてゐた。
時々、扉があくので、皆は、いらつしやいといふ表情で、そちらを見るのだが、實に多い、花賣りの子供や、聲色屋、明暗教會と書いた箱をぶらさげた虚無僧、似顔繪かき、バイオリン引き、琵琶を持つたのや、大學生の制服を着て鹿爪らしい面持で仁丹見たいな懷中藥を賣りつける若もの、赤ん坊を背負つた辻占賣りの女などであつた。彼らはみなひよいとのぞき、客がゐないのを知ると、チエッといつた風に出て行つた。
「ちやんと閉めて行かんか」
藤山は、叱るやうに呶鳴つた、彼らが客に執拗にねだると、いつも彼は黙つて出て來て、

その強い膂力で、つかみだすのであつた。
「ママも隨分おそいね」
と、町子は呟くやうに云つた。そして、煙脂で黄色くなつた舌をだして、
「喫みすぎて、あれちやつた、ザラザラよ」
ママと云ふのは、あき子のことである。
バアテンダーは、のり子がまだ來ないので、その方が心配だつたが、
「ママは、けふはお休みだ」
さう、簡單に云つて、女たちの中に入り、あき子について、また、「ロオトンヌ」の今のやり方について、彼女たちの意見を引き出さうとした。
しかし、その時、山本といふ常連が入つて來た。——彼は、かなり資産家の息子だといふが、もう四十近くになつても獨身で、仕事もなくぶらぶらしてゐた、スタンドに寄りかかつて、ビールを一本だけ、長い時間をかけて飲むのが習慣であつた。其間、ダイスを弄んだり、客の方をジロジロ眺めたり、時には臆病さうにおどおどした眼で女たちと話をしたりするが、色氣があるのかないのか解らなかつた、女たちは、生氣のない皺だらけの彼のことを「インポ」と仇名をつけてゐたのは、云ひあててゐるところもある。
それから、のり子が、どうしたわけか、藤山のいはゆる「あいつ」と、もう一人知らぬ官吏風の男と一しよに入つて來た、——藤山は慇懃に頭をさげて迎へたが、妙な表情をしてゐた。
のり子は、そのまま、誰にとはなしに、
「すみません、おそくなつて」
と、云ひすてて、稍〻急ぎ足で奥の控へ部屋へ、外套や持ち物を置きに行つた。
「あいつ」——さう一種の嫌忌を以て、みんなに何時からか呼ばれてゐる、三流政治雜誌の記者の五十嵐は、始めて伴つて來た背の高い男と、正面のパトロン內田が描いた油繪額の眞下のソファに腰を下した、番になつてゐた町子はチエッと云つた表情で、不愉快さうに顔を歪めて、バアテンの藤山の方を見た。
と云ふのは、五十嵐はいつもまるでそれが特權ででもあるかのやうに、飲みものの代はもちろん、チップさへ置かなかつたからである。
それでも仕方なく、彼女は、
「いらつしやいませ」
と、テーブルの側まで行つたが、五十嵐には殆ど眼をくれず、連れの男をまじまじと觀察した。
近頃の銀座では、男はギャング風を氣取り、女は淫賣婦のやうな裝ひをするのが流行である、と云つても必ずしも大袈裟ではあるまい、——そんな場所の、しかも高級酒場を以て自他共に許してゐる「ロオトンヌ」のやうな店に、何とこの男はふさはしくないことであらう。
古びた冬のソフトをぬぐと、短く刈りつめた小さな頭、深いたて皺を寄せた眉根の下には、眼鏡越しに、これも實に小さな眼がパチパチと仔細あり氣に瞬いてゐて、いつも何か思ひつめて考へてゐると云つた樣子である、慣れないおどおどした態度で、長い脚や手の置き場所に困つた果、不器用に外套のポケットへ手を突込み、脚を組んだが、そのうつむき加減の恰好がまた如何にも實直さうな氣質を想はせた。
「ブランディ？」
と町子はきいた、きまつてそれを、五十嵐は飲むからである。
「ああ——長野さん、それでいいですか」
彼は横に窮屈さうに坐つてゐる男に云つた。
「いや、僕は——そんな」
相手は狼狽したやうに赤くなり、低い聲で答へるのであつた。
「それぢや、一つは」
と、頗で長野と呼ばれる男を指し、
「ビスキをヂンヂャエールで割つてくれ」
レインコートを着た五十嵐はのうのうと納まりかへつて云つた。
スタンドに凭りかかり、いい氣持に顔を眞赤にしてゐる山本だけで他に客はなく、女たちは手がすいてゐるにも拘らず、五十嵐たちの側へやつて來なかつた、——彼女たちは、ママのあき子が近頃彼と關係があることを知

つてゐたし、ママがゐる時なぞは、彼につききつて餘り親しく話をしたりすると、ひどく嫉妬に光つた眼で睨まれ、意地悪な言葉を浴びせられるので、彼を敬遠するやうにしてゐたのである。

だから、町子も註文された品を運んで來ると、ちよつとだけお愛想に、——小さな泡を立ててゐるグラスに、恐る恐る唇をあて、一口飲むと、顏を滑稽にしかめた長野の前の椅子に、腰を下したが、ちやうどレコードが終つたのをいい機會に立つて行き、あれこれと選んだ末、オペレッタ映畫の主題歌をかけて、朋輩たちの話の仲間入りをして了つた。

五十嵐はのけぞりかへつて、煙草をやけにふかしながら、長野に何か云つては、はつはつはつと大きく笑つてゐた。

すると、顏をこしらへたのり子が出て來た、——寂しげな表情である彼女も、このやうな酒場の女らしくない感じであつた、ドレスも質素だし、誰も彼もパーマネント・ウェーヴをかけた派手な髮をしてゐるのに、彼女だけは、一時代前の、あのなつかしいお下げに結つてゐるので、却つて眼立つのであつた。

のり子の姿を見ると、五十嵐は指をあげてさしまねいた、——彼女のおそいのに焦々し、また、偶然この近くで出逢つたのだらうとは思ひながらも、彼女が人もあらうに「あいつ」と一しよに入つて來たのに、やはり拭ひきれぬ一點の疑惑を感じてゐた藤山は、のり子がまた從順に、「あいつ」の云ひなりに、坐り込んで了つたので、尙更むつとしたやうであつた。もちろん、相手はとにかく客だし、どうすることもできぬが、持ち前の稍〻上向き加減の顏を硬ばらせ、眼を冷く据ゑて、露骨に監視してゐるのがわかつた。

そして、彼の胸の中をぎりぎりと嚙むやうな思ひは——俺はよほどのり子に惚れてゐるな、俺らしくもない、と云ふことであつた。

ドアがぱつと勢ひよく開いた、——醉拂つた大學生たちがなだれ込んで來たので、今までの靜かさは急に破られてやかましくなり、五十嵐たちの話聲は、氣を揉んでゐるバアテンダーのところまで屆いて來なかつた。

ここでは、學生はできるだけ相手にしないで、早く追ひかへすやうにしてゐた、大體それらの來る場所がちがふとの肚もあつたし、金は費はないくせに大仰に騷いで、店の空氣を亂雜にして了ひ、他の客に不快を與へるからであつた、——だから、學生が餘り來ると、客種が落ちると云はれた。

「ビールだ！」

と、大學生たちは叫んだ。

藤山は眼をこちらに向けたまま動かさず、ラスターで瓶を拭き、オールドゥブルの腸詰を皿に小綺麗にならべてゐたが、少し睨むやうにして、

「のり子さん！」

と、呼ぶのであつた。

彼女が別に番であるのではなかつたが、五十嵐の話相手をさせて置くには、どうにも忌忌しく、耐へられなかつたのである。

「行かなくてもいいよ、遊んでるやつにさせとけばいいんだ、君にはちよつと話がある」

立ちさうにした彼女の手を攫んで、無理矢理に引きとめ、五十嵐は半ば藤山にも聞えるやうに、大聲を出した。

學生たちは、とりとめもなく呶鳴り、足をばたばたならして床を踏み、意味のない歌をうたつては時に猥らな言葉を吐き、莫迦笑ひに笑ひくづれてゐた、その間に、藤山の表情は次第に嶮しく歪んで來るのであつた。

「長野さんがね、のり子！」

と、五十嵐は云ひ出した。すると、几帳面な官吏風の男は、下うつむいてゐたが、びつくりしたやうに、眼だけをちらと動かした。

「この長野さんは、いい人だらう、どうだ、さう思はないかね、——拓務省ぢや、大へんえらい方なんだぞ、永い間、滿洲へ視察に行つてられたんだが、ほんの四五日前に——」

「君、五十嵐君！」

何を云ひはじめるのかと、小心者らしく、長野が手を抑へるやうにして、とめるのに、尙も、

「どうだ、のり子」

と、そこで、少しく惡戲氣な眼つきで、堅苦しい相手の男を見つめながら、

试读结束 需要全本请在线购买： www.ertongbook.com